

平成 27 年度

和歌山県立近代美術館の運営状況に対する評価書

和歌山県立近代美術館

1	展覧会（企画展）	2
	展覧会（常設展）	8
2	調査・研究	14
3	作品・資料の収集	15
4	作品・資料の状態調査、保存修復、保存環境の整備等	16
5	教育普及	17
6	国内外との連携	20
7	安全と快適性	21
8	入場者数と財源の確保	23

和歌山県立近代美術館評価様式（平成 27 年度事業評価用）

<p>美術館長による評価</p>	<p>新館のオープンから 20 年以上を経過し、前後に開館した公立美術館がいずれも運営に苦心を強いられている状況下で、年間を通じて質の高い企画展・常設展を開催できたことは評価に値する。また、展覧会企画の裏付けとなる調査・研究活動が、一方で作品・資料収集(とくに寄贈)の契機となり、その充実がまた新しい企画を生み出すといった好循環が、基本的に保たれていることは注目に値する。</p> <p>教育普及活動においても、教育現場や大学との連携を密に保つことによって、多彩な美術館教育を日常的に提供できており、その結果とりわけ夏期における賑わいが年々見られるようになったことは評価できる。情報発信・広報活動にも一層創意工夫を重ね、美術館に通年の賑わいを実現できるよう努力することが望まれる。</p> <p>作品・資料の保存・管理、施設の維持・修繕なども概ね適正に行われたが、収蔵庫の狭隘化と空調をはじめ設備の老朽化は限界に近づいており、その結果、作品・資料、施設ともに管理面でのトラブルが発生しやすくなっているのは事実である。より緊張感をもって対処するとともに、大規模改修をにらんでのロードマップ策定に着手する必要がある。</p>
<p>評価部会による評価</p>	<p>事業予算が限られている中で、展示意図の明確な展覧会を多く開催し、研究面でも成果を上げているものと評価できる。入館目標は実績からかけ離れたものでもないもので、達成に向けて努力してほしい。目玉となる作品を持ってくれば人が入るという意見もあるが、必ずしもそうとは言えない。教育普及活動での取組みは、一般に入館者が少なくなる夏の期間の展覧会実績にも反映しており、更に多彩な取組みが期待される。ただ、企画展もコレクションを活用した内容になっており、コレクション展との差別化が難しい。全体に変化がないという印象を一般に与えていることもあり、企画展・コレクション展という一般的な枠組みを離れた企画の立て方を検討する必要もある。施設の改修にも計画的に取り組むべきだが、単に施設の修理、更新でなく、建物のイメージを変えるような改修を行うことも検討に値する。</p>

1 展覧会（企画展）

美術館長による所見	保田父子の彫刻展、村井、宇佐見の回顧展といった館の使命ともいうべき展示に、現代美術 5 作家による新作中心の展覧会など新しい試みも加え、予算的制約の中で多彩な企画展を展開したことは高く評価される。図録等による記録集の作成が不十分だった点は、予算獲得努力と工夫によって今後改善することが望ましい。
評価部会による所見	個展を中心にしながら、ある時代の歴史を紹介するという意図が明確に認められる企画が多く、評価できる。他館では入館の少ない夏季休暇中に多くの入館者があることも努力が認められる。ただ、美術史的な枠組みに当てはめるだけでなく、所蔵品を生かして既成概念を打ち破るような工夫も望まれる。

①企画展-1

和歌山と関西の美術家たち リアルのリアルのリアルの [再掲]

会 期：平成 27 年 [3 月 14 日（土）] ～5 月 10 日（日）

会 場：展示室 C（2 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	基本的には各自の個展形式で紹介するが、現代の美術、特に関西の美術に顕著に見られる問題意識を本展覧会のテーマに据え、共通する視点が見い出せるように、展示を構成する。作家たちともテーマについての議論を重ね、新作の制作に企画担当学芸が助言を行いつつ、展覧会に向けた新たな取組みを促す。
自己評価・課題・改善案	作家と議論を重ねることで、それぞれが新しい表現に取り組み、質の高い出品作の制作へとつながることができた。さらに、当館が美術の新しい動向に積極的に関わる活動的な美術館であるというイメージを県内外に発信することができた。こういった現代の美術をとりあげる機会は、当館にとっても大切であり、継続すべきことであるが、それを継続できる体制を作ることが課題である。展示点数：5 作家 46 点

B. 図録・パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	ポスター、チラシ、パンフレット、出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	ポスター、チラシのほか、ハガキを制作した。出品目録は、解説付きの目録とした。またパンフレットは 96 ページの図録にでき、各作家の仕事をより深く紹介することができた。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	出品作家たちによるトークイベントを 1 回、学芸員によるフロアレクチャーを 2 回実施する。
自己評価・課題・改善案	オープン当日に、5 人の作家それぞれによるアーティストトークを開催し、約 100 人の参加者を集めた。学芸員によるフロアレクチャーを 2 回開催し、出品作品について理解を深める機会となった。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	活躍めざましい若手の現代美術家たちを、和歌山から発信する展覧会として、県内のみならず他府県から大注目される企画となるよう、プレスリリース、広報印刷物を通して、県外に積極的に周知し、新たな来館者層を獲得する。
自己評価・課題・改善案	出品作家から了解をとって会場での撮影を可能とすることで、来館者が SNS やブログを通じて展覧会を紹介し、口コミで展覧会の情報が広まった。それにより、関西圏を中心に、あらたな観客層の関心を集めることができた。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	現代美術作品の展示ということもあり、細やかな対応が必要となる作品が多かったが、展示前に燻蒸を行うなど、作家と相談を重ねて対策を考え、必要な措置を行った。大型作品も多かったが、事故等もなく無事に終えることができた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	3,450 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	3,453 人

①企画展-2

保田龍門・保田春彦展

会 期：平成 27 年 5 月 26 日（火）～7 月 5 日（日）

会 場：展示室 C（2 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	保田龍門の没後 50 年を迎え、「龍門・春彦往復書簡」が刊行されたことを踏まえ、親子がたどった芸術の道をあらためて紹介する。
自己評価・課題・改善案	保田龍門と春彦の作品 114 点を二部に分けて時代順に紹介した。当館展示室の雰囲気を活かし、立体作品の美しさを引き出す展示ができた。今後さらに作家研究を進め、紹介していくことが必要である。

B. 図録・パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	ポスター、チラシ、出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	ポスター、チラシ、出品目録、英語版概要を制作した。図録を作れるようにしたい。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	ミュージアムトーク(スライド・レクチャーとフロアレクチャーのセット)を 2 回開催する。
自己評価・課題・改善案	ミュージアムトークを 2 回開催した。まずホールで野外作品をスライドで紹介した後、展示室に移動して解説し、作品について理解を深められるようにした。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	共にヨーロッパへの留学を体験し、芸術家としての人生をそれぞれに歩んだ二人の足跡を、あらためて迎える機会とする
自己評価・課題・改善案	展示の導入部に保田春彦が近年発表した《闘病デッサン》(2013 年作)と《父の像》(1951 年作)を展示し、親子二代の 100 年にわたる足跡を循環するように迎える構成にした。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	入口近くに展示した《父の像》は作品保全を考慮し、2013 年に鑄造されたブロンズを展示したが、制作当時の雰囲気や細部を伝えるため、石膏原型を展示できるように工夫すべきだった。露出展示する立体作品が多かったが、テープによる結界表示と監視員の注意により事故無く会期を終えることができた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	2,300 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	1,774 人

①企画展-3

なつやすみの美術館 5「つぶやき おはなし ものがたり」

会 期：平成 27 年 7 月 14 日（火）～8 月 30 日（日）

会 場：展示室 C（2 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	若年層を中心に楽しく美術に触れる経験ができる場を生み出す。展示点数：60 作家 100 点を予定。
自己評価・課題・改善案	一つの作品を出発点とし、さまざまなモチーフを取り出して他の作品とのつながりを考えながら鑑賞する構成にした。小・中・高校の教員と協働で制作した 3 種のワークシートに、作品カードをコラージュする試みを展示室の一角で実施し、夏休みの課題として設定されたことにより、生徒たちが美術館に親しむ機会を生み出すことができた。来館者が感想を書き込める場を展示室付近に設け、互いの関心を知ることができるようにした。展示点数：55 作家 70 点。

B. 図録・パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	ポスター、チラシ、出品目録、各種ワークシートを制作する。
自己評価・課題・改善案	ポスター、チラシ、出品目録（A4 判 6 頁）、教員との協働による鑑賞ワークシート（小学校版、中学校版、高校版）、作品カード、大学生による鑑賞ワークシート、英語版概要を制作した。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	フロアレクチャーを 2 回、子供向けギャラリートークを 3 回、NPO との共同によるワークショップを 1 回実施し、主体的な体験としての鑑賞に導くことをめざす。
自己評価・課題・改善案	一般向けギャラリートークを 2 回、子供向けギャラリートークを 3 回実施したほか、和歌山大学学生がガイドを務める鑑賞会を 24 回実施し、来館者が美術館を楽しめる機会を設けるとともに、学生たちの学びの場も提供することができた。NPO 法人和歌山芸術文化支援協会との共催により、県立図書館と連動したワークショップを外部講師（新井厚子氏）を招いて実施した。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	主軸となる作品について、過去に鑑賞した生徒たちの言葉や、和歌山大学の学生たち、教員による言葉を、新たな来館者の鑑賞を促すキーワードとして提示する。
自己評価・課題・改善案	一般向けと子供向けのギャラリートークを実施し、幅広い観客層が楽しめるようにした。個々の作品を鑑賞する切り口を、過去に鑑賞した生徒たちの言葉や、和歌山大学の学生たち、教員による言葉を参考に、極めて単純な 3 行にまとめて「つぶやき」のように提示した。来館者が容易に作品に向けて言葉を発することができるよう促す試みであった。展示の意図として、作品自体の並び方に脈絡はないので、展覧会として一つにまとめあげるためには、ワークシートに助けられた面が大きい。展覧会構成にはさらなる検討が必要である。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	動く作品も展示したほか、展示室内に鑑賞者が工作するエリアを展示室内に設けたが、作品、来館者ともに事故なく終わられた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	9,000 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	9,297 人

①企画展-4

ここだけの日本画

会 期：平成 27 年 9 月 11 日（金）～11 月 3 日（火・祝）

会 場：展示室 C（2 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	和歌山ゆかりの日本画家である下村観山、川端龍子、亀井玄兵衛、野長瀬晩花、山口八九子、日高昌克、稗田一穂を中心に、当館所蔵の日本画の名品を展示。展示点数：40 作家 200 点を予定。
自己評価・課題・改善案	当館の日本画コレクションの主要な作品を選び紹介した。展示点数は 30 作家 59 点。「京都画壇」、「東京画壇」、「南画」、「戦後美術」などのコーナーに分けて展示し、日本画表現の幅広さを伝えることができた。展示の仕方について工夫を加えていきたい。

B. 図録・パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	ポスター、リーフレット、出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	ポスター、パンフレット、出品目録のほか、チラシ、作家解説、英語版概要を作成した。図録を作れるようにしたい。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	講演会を 1 回、フロアレクチャーを 3 回開催する。
自己評価・課題・改善案	日本画家、千住博氏を招いて講演会を開催し 131 人の参加者があった。日本画への関心を高めることができた。フロアレクチャーを 3 回実施した。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	当館所蔵の日本画作品を悉皆調査し、データベースの充実をはかる。作家や遺族、所蔵家等とコンタクトを取る。
自己評価・課題・改善案	作品調査は出品作品のみに止まったため、継続が必要である。日本画家、稗田一穂氏へのインタビューを行い、貴重な証言を得られた。また出品作家に関する文献調査を行って作家解説に反映させた。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	展示ケースが限られており、露出展示の作品が多かったが、結界を設置することにより保全を図った。今後工夫を加えていきたい。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	4,200 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	3,875 人

①企画展-5

生誕 110 年 村井正誠展 ひとの居る場所

会 期：平成 27 年 12 月 18 日（金）～平成 28 年 2 月 14 日（日）

会 場：展示室 C（2 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	抽象絵画の魅力と、和歌山ゆかりの作家である村井正誠の作品を通して再発見できる機会とする。同時に、戦前にいち早く抽象絵画を発表していたため、「抽象絵画のバイオニア」としての部分が強調されてきた村井の仕事と、普遍的な絵画の追求という側面から位置づけをなおす。
自己評価・課題・改善案	93 点、資料 2 点をほぼ時代順に展示した。難解とされがちな抽象表現を身近なものに感じられるよう、作品の選定や展示方法、解説パネルの文章を工夫した。村井が関わった「新時代洋画展」や「自由美術家協会」の活動を研究し、紹介することが今後の課題である。

B. 図録・パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	ポスター、リーフレット、出品目録を制作する
自己評価・課題・改善案	ポスター、パンフレット、出品目録、英語版概要を制作した。パンフレットに重要な作品図版は収録できたが、このような回顧展には出品作品を網羅した図録が必要である。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	講演会を 1 回、フロアレクチャーを 2 回開催する
自己評価・課題・改善案	学芸員による講演会を 1 回、フロアレクチャーを 3 回開催した。講演会には 110 名が参加し、好評だった。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	ふだん出品する機会の少ない版画作品の紹介を増やして、村井がいかに慎重に色彩と形態に向き合っていたのかを提示し、観客がひとりの作家の内面まで踏み込めるようにする。
自己評価・課題・改善案	当館のコレクションを中心とした展覧会であるため、新鮮味に欠けることのないよう、コレクション展では紹介する機会の少ない版画作品の出品を増やした。村井にとって版画制作が油彩表現と並行し、観客が作家の内面に徐々に踏み込めるよう、解説パネルの文章を工夫した。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	作品と来館者の安全のため、見通しをよくし、監視員の目がいきとどく展示構成とした。このことにより、展示の流れに来館者の関心を引くことができ、さらに村井作品の大らかな印象を展示空間全体で演出できた。解説をコーナーごとのパネルにまとめ、解説を読む人と読まない人が一緒に展示を見る時に煩雑さを感じないようにした。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	3,000 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	2670 人

①企画展-6

宇佐美圭司回顧展

会 期：平成 28 年 3 月 1 日（火）～ [4 月 17 日（日）]

会 場：展示室 C（2 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	和歌山県にゆかりのある宇佐美圭司(1940-2012)の画業をアトリエに残された作品を中心に紹介し、青年期のドローイングから遺作まで、現代における絵画の意味を問い続けた制作の歩みを 61 点により回顧する。
自己評価・課題・改善案	作家が 2012 年に没してから関西では初めてとなる回顧展であり、ガンと闘いながら制作された最後の作品を取り上げることで、業績の全体像を提示することができた。作品輸送費が潤沢でなく、またカタログを作る経費も捻出できないことから、他館が所蔵する代表的な作品の借用ができなかったため、各時代を通じて総ての業績を通覧するような内容にすることはできなかった。ご遺族の支援によりカタログを制作できることとなったが、展覧会開催の基本的な条件として印刷物での記録を残せる体制を作る必要がある。

B. 図録・パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	ポスター、チラシ、出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	ポスター、チラシ、出品目録、英語版概要を制作した。図録の制作に協力した。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	講演会を 1 回、フロアレクチャーを 4 回開催する。
自己評価・課題・改善案	外部講師(岡崎乾二郎氏)を招いて講演会を 1 回、学芸員によるフロアレクチャーを 4 回開催し、全体で 153 名の聴講があった。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	制作時の年齢や同時代の美術、社会の状況を併せて考察できる展示を工夫する。
自己評価・課題・改善案	制作時の年齢をキャプションに書き込むなど、作家自身がどのように作品を変化させたかが見て取れるようにした。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	大型のキャンバス作品がほとんどで、カバーなしで展示を行ったが、床への結界表示により事故無く展示を終えることができた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	会期中 2,050 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	1,732 人(平成 27 年度。会期中は 2,585 人)

1 展覧会（常設展）

美術館長による所見	各コレクション展で、館の特色ある所蔵品を順次紹介することに加え、いずれも「特集」を併設して多様な美術に対するさまざまな切り口を提示し、あるいは企画展と関連の作品を並べるなど、工夫の痕が窺える。ただ、展示の質量に対し解説パネルなどによるガイダンスがやや不十分だった。来館者を美術に誘うアクセスとも絆ともいえるツールなので、力を注ぐよう望みたい。
評価部会による所見	企画展よりコレクション展の方が入館者数が多くなっており、内容も充実している。特にコレクション展一秋の中で開催された移民に関する企画など興味深い内容である。ただ、常設展という枠組みの中で開催すると埋もれてしまって勿体ないと思われる。企画・常設という枠を外すことも考えてみればどうか。

②常設展-1

コレクション展 2015- 春 特集：『版画』の明治- 印刷と美術のはざままで [再掲]

会 期：平成 27 年 [3 月 17 日（火）] ～5 月 24 日（日）

会 場：展示室 A・B（1 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	常設展示 特集展示に合わせて、明治時代の日本画・洋画の展示を行うとともに、和歌山ゆかりの作家を中心に近現代美術の秀作を展示する。また、会期中は春休みや 5 月のゴールデンウィーク等が重なるので心の休息を得られるような展示にする。 特集展示 美術は身近な産業のなかからも生まれてきたと知ることによって、美術への関心を深める。
自己評価・課題・改善案	常設展示 当館の作品収集方針やその核となっている作品を紹介する構成にした。また同時期に開催された企画展に合わせて、関西の現代美術を紹介するコーナーを設けた。展示空間を考えて効果的な展示方法を工夫することが今後の課題である。展示点数は 81 作家 97 点。 特集展示 教科書や雑誌、書籍、カレンダーやポスター、新聞附録など、明治期の優れた技術による印刷物が、当館コレクションの柱のひとつである創作版画の背景にあったことを示した。また、東京中心に語られてきた印刷史とは異なる関西の歴史を紹介することができた。明治期だけでなく、現代においても生活と美術が密接な関係にあることを伝えることが必要である。展示点数は 86 作家 230 点、資料 2 点。

B. パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	常設展示 出品目録を制作する。 特集展示 パンフレット・出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 出品目録を制作した。 特集展示 パンフレット、出品目録を制作した。ほとんどの来館者にとっては、おそらく初めて触れるであろう明治期の精緻な印刷を紹介するにあたり、エッセイを掲載したパンフレットと、解説付きの出品目録を用意し、親しみを持てるよう工夫した。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	特集展示 フロアレクチャーを 2 回実施する。スライドレクチャーを 1 回実施する。
自己評価・課題・改善案	特集展示 スライドレクチャーを 1 回（前年度と合わせると 2 回）、フロアレクチャーを 2 回開催した。高い関心が寄せられた。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	常設展示 解説キャプションや解説パネルを充実させることによって、魅力的で充実した展示を工夫する。 特集展示 実用印刷の研究によって、コレクションの柱である創作版画誕生の背景を探る。
自己評価・課題・改善案	常設展示 当館のコレクションの特色がわかるよう、コーナーごとに解説パネルを設置した。さらに作家解説や作品解説を充実させることが課題である。 特集展示：明治 40 年代にはじまる創作版画の作家たちが、なぜ美術作品としての版画を作ろうとしたのか、その源泉として彼らが生まれ育った時代に発展した印刷術を掘り起こすことで、その精緻な技術が印刷物への関心を育み、芸術的な可能性を追求するきっかけとなったことを示した。広報の充実をはかることが今後の課題である。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	常設展示 無事に会期を終了した。 特集展示: 来館者の動線を予測し、安全な展示構成を工夫した。展示作品はすべて額装あるいは展示ケース内に入れるようにして保全を図りつつ、鑑賞に集中できるよう配慮し、無事に会期を終えた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	2,300 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	3,847 人

②常設展-2

コレクション展 2015- 夏 特集：くりかえしの美

会 期：平成 27 年 6 月 10 日（水）～9 月 10 日（木）

会 場：展示室 A・B（1 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	常設展示 コレクションの特色を体感できる展示内容とする。展示点数:50 作家 100 点を予定。 特集展示 作品を構成する要素としてさまざまな「くりかえし」に着目し、作品を味わう糸口を提示する。展示点数 40 点を予定。
自己評価・課題・改善案	常設展示 夏期休暇中の作品、来館者との安全を考慮し、見通しのよい展示空間にするため、60 作家 68 点(展示室内のみ)による展示とした。 特集展示 作品を形づくる要素としてのくりかえしに着目し、「形のくりかえし」「くりかえしのルール」「くりかえして一つになる」「意味のくりかえし」という 4 つの章を立て、32 作家の 53 点を展示した。作品の形を生み出す単純なルールに気付くことを入口に、作品への理解を深めるきっかけを作ることができた。また作家・南野馨氏の協力を得て、近作の紹介とワークショップを行った。

B. パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	常設展示 出品目録を制作する。 特集展示 出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 出品目録を制作した。 特集展示 出品目録、英語版概要を制作した。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	特集展示 フロアレクチャーを 3 回実施する他、地元 NPO の協力を得て出品作家によるワークショップを 1 回開催する。
自己評価・課題・改善案	特集展示 フロアレクチャーを 4 回実施するとともに、和歌山県文化振興財団主催、NPO 和歌山芸術文化支援協会協力により南野馨氏によるワークショップを開催した。

D. (A, B, C 以外の)展覧会の工夫

平成 27 年度目標	特集展示 若手作家の協力を仰ぎ、関連作品の特別出品を行う。
自己評価・課題・改善案	特集展示 作家・南野馨氏の協力を得て、テーマと関連する作品を出品することができた。展示のテーマは入口パネルや挨拶文、各章の解説文で明示したが、意識せずに見ていく観客も多く見られた。展示は何らかの意図を持って行われていることを伝える方法を工夫したい。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	常設展示 学校の夏期休暇中に開催されるため、児童、生徒の来館が多く、作品、来館者ともに特に安全確保に注意を要する必要があったが、通路を広くするなど展示室の構成を考慮することにより、特に事故等はなかった。 特集展示 大型の立体作品など露出展示を行った作品もあったが、床への注意表示などにより事故無く会期を終えることができた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	11,700 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	11,156 人

②常設展-3

コレクション展 2015- 秋 特集：生誕 120 年：逸見 享

会 期：平成 27 年 9 月 19 日（土）～12 月 6 日（日）

会 場：展示室 A・B（1 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	常設展示 コレクションの特色を生かした展示とする。特に石垣栄太郎などアメリカへ移民として渡り、活動した作家の作品を中心に紹介する。展示点数：60 作家 100 点 特集展示 本県ゆかりの版画家である逸見享の生誕 120 年を記念し、館蔵品のすべてを紹介。展示点数：1 作家 100 点
自己評価・課題・改善案	常設展示 和歌山大学紀州経済史文化史研究所との共催により、特集「アメリカ移民の歴史と芸術家たち」を開催できた。4 人の芸術家、石垣栄太郎、浜地清松、ヘンリー杉本、保田龍門の作品と、彼らの創作の背景にある、和歌山県におけるアメリカ移民の歴史を資料展示により再検証した。展示点数：42 作家 67 点、資料 30 点 特集展示 逸見享の初期から晩年までの版画作品を、個人蔵品もあわせて展示し、初の回顧展の機会となった。近年収蔵された新資料も含め、当館の逸見享コレクションの全貌を紹介した。展示点数：1 作家 77 点

B. パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	常設展示 出品目録を制作する。 特集展示 出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 出品目録のほか、チラシ、ハガキ、英語版概要を制作した。パンフレットなど記録に残るものを制作することが今後の課題である。 特集展示 出品目録を制作した。逸見享コレクションを紹介するには図録を制作することが必要である。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	常設展示 和歌山大学等と連携したイベントを 1 回開催する。 特集展示 フロアレクチャーを 2 回開催する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 和歌山大学紀州経済史文化史研究所と共催し、ギャラリートークとシンポジウムを行った。梅田律子（那賀移民史懇話会）、櫻井敬人（太地町歴史資料室）、東悦子（和歌山大学）、亀井勝博（和歌山県国際交流協会）、迫間侑（和歌山県中南米協会）、奥村一郎（当館）が参加し、県内における移民の歴史のこれまでとこれからについて協議した。 特集展示 常設展示でのギャラリートークの中で解説した。

D. (A, B, C 以外の) 展覧会の工夫

平成 27 年度目標	常設展示 和歌山大学など外部の移民研究者の協力も得て、歴史的社会的な文脈から作家の活動がわかるような工夫をする。 特集展示 館藏品にはない初期の詩画集や商業美術関連の仕事についても解説パネル等で紹介する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 和歌山大学紀州経済史文化史研究所、太地町歴史資料室、那賀移民史懇話会の協力を得て、和歌山県の紀北と紀南でそれぞれ事情の異なる移民の歴史を、資料展示によって示しながら、歴史的社会的な文脈から芸術家たちの作品に光を当てることができた。 特集展示 初期の詩画集は個人蔵のオリジナルを展示紹介することができた。商業美術での活躍については、解説パネルで図版と共に紹介した。さらに装幀や詩集編集の業績を詳しく紹介することが今後の課題である。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	常設展示、特集展示ともに事故なく終わられた。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	5,800 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	5,541 人

②常設展-4

コレクション展 2015/16- 冬 特集：光について

会 期：平成 27 年 12 月 23 日（水・祝）～平成 28 年 3 月 13 日（日）

会 場：展示室 A・B（1 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	常設展示 所蔵作品への理解を深められるよう、テーマを設けながら近現代美術の秀作を展示する。展示点数：50 作家 80 点 特集展示 光の表現に注目して作品を紹介する。展示点数：20 作家 40 点
自己評価・課題・改善案	常設展示 同時期開催の村井正誠展にあわせ、村井正誠と関係のあった作家、作品を数多く展示した。キャプションにマークと解説を付けることで、より立体的に時代や作家の関係を見られる様に工夫した。展示点数：52 作家 74 作品、資料 15 点 特集展示 光をテーマとする、写真、映像、絵画、版画など多ジャンルの作品を紹介した。各作家の表現についての理解を深めるため、作家数は絞り、作家ごとの出品点数を多くした。さまざまな光の表象を通して世界のあり方を問い直す契機となった。展示点数：7 作家 25 点

B. パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	常設展示 出品目録を制作する。 特集展示 出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 出品目録を制作した。 特集展示 出品目録のほか、ハガキ、英語版概要を制作した。パンフレットなどを制作できるとよかった。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	特集展示 地元 NPO と協力して展示をより理解できるワークショップを 1 回開催する。
自己評価・課題・改善案	NPO 和歌山芸術文化支援協会と協力し、外部講師（伊藤彩氏）を招いたワークショップを雄湊小学校で開催した。

D. (A, B, C 以外の) 展覧会の工夫

平成 27 年度目標	常設展示 新たなテーマや切り口による展示構成により、コレクションをより魅力的にみせる工夫をする。会場内の作家・作品解説を充実させる。 特集展示 コレクションに加え、光をテーマとする若手作家の作品を紹介する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 次年度の開催の大規模展に向けて、「北山清太郎と大正の洋画家たち」のコーナーを設けた。それによって、通常のコレクション展示作品が中心であっても、いつもとは違う作品配置を行うことができた。関連資料も展示し、手元でも見られる資料を配置した。 特集展示 コレクションに加え、光をテーマとする和歌山県出身の現代作家、前谷康太郎の新作を 3 点展示することができた。暗室を設営し、大規模なビデオインスタレーションを行った。コレクションを様々な切り口でみせることはもちろん大切だが、来館者の期待や反響は新たな作品の展示に対する方が大きいことを実感した。

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	常設展示 作品、来館者ともに事故なく終えられた。 特集展示 暗室で事故がないように、出入口周辺での安全確保を工夫した。事故等はなかった。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	6,000 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	3,506 人

②常設展-5

コレクション展 2016- 春 特集：謄写印刷工房から—印刷と美術のはざまで

会 期：平成 28 年 3 月 29 日（火）～ [5 月 29 日（日）]

会 場：展示室 A・B（1 階）

A. 展覧会の内容・出品作品・構成等

平成 27 年度目標	常設展示 和歌山ゆかりの作家を中心に近現代美術の秀作を紹介。さらに特集展示に合わせて、創作版画をはじめとする様々な版画作品をならべ、版画技法のバリエーションを見比べられるように展示する。展示点数：70 作家 90 点 特集展示 かつて、生活の一番近くにあった印刷術である謄写版をとおして美術の世界に入っていった人たちの姿により、美術が身近であることを示す。和歌山ゆかりの謄写版画家清水武次郎のコレクションを持ち、関連作家の作品を収集してきた当館ならではの展示とする。展示点数：10 作家 80 点
自己評価・課題・改善案	常設展示 和歌山ゆかりの作家を中心に近現代美術の秀作を展示するとともに、特別展「恩地孝四郎展」に合わせて、田中恭吉、藤森静雄の油彩画や、「一木会」の作家の作品など関連作品を展示し、恩地と同時代に活躍した仲間の作品や、後世に与えた影響がわかるように工夫した。展示点数：80 作家 126 点。 特集展示 謄写版で印刷業を営む人々の間から美術作品としての謄写版画が生み出された過程を紹介し、「恩地孝四郎展」にあわせ、彼が創作版画を提唱して活動していた同時期に、商業印刷に携わる印刷工房からも版画が生み出されていたことを示した。器材や教材資料も展示し、手仕事の様子に観客の想像が及ぶように工夫した。展示点数：9 作家 124 点、資料 17 点など。

B. パンフレット・出品目録等の制作

平成 27 年度目標	常設展示 出品目録を制作する。 特集展示 リーフレット・出品目録を制作する。
自己評価・課題・改善案	常設展示 出品目録を制作した。 特集展示 出品目録、英語版概要を制作した。

C. 関連事業

平成 27 年度目標	(27 年度の会期 3 日間に関連事業は開催しない。)
自己評価・課題・改善案	(27 年度の会期 3 日間に関連事業は開催しない。)

D. (A, B, C 以外の) 展覧会の工夫

平成 27 年度目標	<p>常設展示 解説キャプションや解説パネル、作家解説を充実させることによって、魅力的で充実した展示を工夫する。</p> <p>特集展示 謄写版とはどのような印刷術=版画技法だったのかをわかりやすく示し、その日常性から、観客に現代の生活のなかにある技術から美術が生まれてくる可能性を伝える。</p>
自己評価・課題・改善案	<p>常設展示 当館の豊富なコレクションを生かして、1 階・2 階にある展示室の両方で恩地孝四郎の世界を紹介することができた。</p> <p>特集展示 謄写版がコピー機などの普及によって姿を消すのと同時に、版画技法としても忘れられつつあるなか、資料を発掘して手仕事の凄さを示すことができた。また新たな表現が試みられることを願ってこの技法を次の世代に伝えようとする活動も紹介した。今後は印刷史全体を視野に入れ、産業の現場から美術が生まれてきたことをさらに紹介したい。</p>

E. 出品作品・資料・来館者の安全確保

平成 27 年度目標	出品作品・資料・来館者の安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	事故等はなかった。

F. 入館者数

平成 27 年度目標	200 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	140 人

2 調査・研究

美術館長による所見	企画展などに生かすべく、館が扱う範囲の美術について、学芸員による熱心な調査研究が日常的に行われていることは評価できる。しかし、その成果を問うべき出版が、予算の制約もあって十分ではない。美術館事業を未来につなぐ意味からも、紀要の刊行などを目指して欲しい。
評価部会による所見	基礎的な調査を地道に行っただけで、展覧会に結実させていることは、この美術館の特色として評価できる。全国的に、綿密な調査に基づいて開催される展覧会が減っていく傾向があり、学芸員が展覧会を企画できなくなっている中であるが、調査・研究を展覧会に結びつける努力を続けていただきたい。

①調査・研究

A. 美術史等についての調査・研究主題

平成 27 年度目標	美術史等についての調査・研究を行う。
自己評価・課題・改善案	学芸員各自がそれぞれの主題に関する調査・研究を行った。

B. 外部研究機関・団体等と共同した調査・研究

平成 27 年度目標	外部研究機関・団体等と共同した調査・研究を行う。
自己評価・課題・改善案	2 件の調査・研究を行った。

②調査・研究成果の活用

A. 展覧会・教育普及活動等への成果の反映

平成 27 年度目標	展覧会・教育普及活動等に成果を反映する。
自己評価・課題・改善案	9 件の成果があった。

B. 学術的公表（館研究紀要・報告書・学会誌・インターネット等）

平成 27 年度目標	学術的公表（館研究紀要・報告書・学会誌・インターネット等）を行う。
自己評価・課題・改善案	13 件の学術的公表を行った。

3 作品・資料の収集

美術館長による所見	少額とはいえ、例年並みの購入予算を活用して着実に質の高い作品を取得し、また寄贈による作品収集もコンスタントに続けたことは、館のたゆみない努力の結果として高く評価できる。ただ、収蔵庫の狭隘化と作品数の飛躍的な増加の結果、資料管理にやや不安が見受けられた。今後収蔵スペースの拡充、管理体制見直しなどの課題を解決すべきであろう。
評価部会による所見	少ないながら着実に予算が計上されていることは評価できる。収集作品もコレクションを系統的に発展させる内容である。

(報告) 平成 28 年 3 月末時点の所蔵作品点数 11,868 点

①作品・資料の収集

A. 美術作品収集方針に沿った作品・資料の収集（コンプライアンス、収集手続き）

平成 27 年度目標	美術作品収集方針に沿った適正な手続きに基づいて作品・資料の収集を行う。
自己評価・課題・改善案	美術作品収集方針に沿った適正な手続きに基づいて作品・資料の収集を行った。収蔵庫の狭隘化に伴い、保管方法の工夫と注意が課題である。

B. 購入、受贈に係る作品・資料の点数、内容

平成 27 年度目標	購入・受贈において作品・資料の点数、内容が適切であるようにする。
自己評価・課題・改善案	購入 8 件・受贈 11 件 33 点で、点数、内容ともに適切であった。

②図書資料の収集・公開

A. 図書資料の収集、研究や閲覧への活用

平成 27 年度目標	図書資料を収集し、研究や閲覧に活用する。
自己評価・課題・改善案	図書資料を収集し、研究や閲覧に活用した。

4 作品・資料の状態調査、保存修復、保存環境の整備等

美術館長による所見	収蔵庫・展示室の温湿度管理、防虫・防黴などへのスタッフの意識が高く、処置作業などが積極的かつ綿密に行われたことは評価に値する。また、状態調査についても日常業務として不断に行われているが、一方で必要な修復がなかなか施せず、資料管理にもやや不適切・不十分な点が見受けられる。問題意識を持って、今後これらの点を改善すべく対処して欲しい。
評価部会による所見	適切に行われている。資料の管理体制を一層充実させることが望まれる。

①作品・資料の状態調査

平成 27 年度目標	作品・資料の状態調査を適切に行う。
自己評価・課題・改善案	展示、貸出の機会にあわせて継続的に所蔵品の状態を調査し、保存上の対策を必要とする作品については、マウントや額裏板の改良・交換を中心に処置を進めた。

②作品・資料の保存環境

平成 27 年度目標	作品・資料にとって適切な保存環境を保ち、整備する。
自己評価・課題・改善案	これまでの数年間に蓄積したデータをもとに、季節、天候による環境の変化から起こる虫菌害を抑えることができた。計画的な清掃にあわせ、毎月のトラップによるモニタリングの結果によって対策を加え、良好な保存環境を実現しつつある。空調設備の老朽化に伴う環境の不安定要素への対応が課題である。

③作品・資料の保存修復

平成 27 年度目標	作品・資料に対し適切な保存修復を行う。
自己評価・課題・改善案	展示予定作品を中心に修復計画を立て、効果的な修復を行えた。また、作品の保存に適した素材を使った額装も進んでいる。さらに油彩作品の修復等を進め、展示と保存に適した状態に近づけることが課題である。

④作品・資料の管理

A. 作品・資料の管理（台帳・データベース）

平成 27 年度目標	作品・資料の管理(台帳・データベース)を適切に行う。
自己評価・課題・改善案	作品・資料の管理を適切に行った。受入書類の台帳・作品カードおよびデータベースの管理について意識を高める必要がある。

⑤作品・資料のデータ公開

平成 27 年度目標	作品・資料のデータを公開する。
自己評価・課題・改善案	展覧会出品目録、新収蔵作品目録を年報に掲載した。

5 教育普及

美術館長による所見	教育委員会や学校現場、和歌山大学との連携によって、活潑な美術館教育を展開し、目標値以上の活動を展開したことは高く評価して良い。WEB や SNS による情報発信も着実な成果を上げた。反面、旧来の印刷メディアによる広報が低調であり、バランスの良い普及活動が望まれる。
評価部会による所見	高校生以下が無料であることをアピールするなど、学校現場との連携を強化しながら、来館につながる活動を行っていることは評価される。教育委員会のバックアップも重要である。観光資源として活用を考えるのは和歌山市では難しいと思われるが、国民体育大会など他の行事に合わせてのアピールは評価できる。

①学校・団体鑑賞の受入

A. 受入回数

平成 27 年度目標	120 件を目標とする。
自己評価・課題・改善案	152 件を受け入れた。

B. 参加者数

平成 27 年度目標	3,000 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	3,692 人が参加した。

C. 鑑賞教材等の制作

平成 27 年度目標	展覧会にあわせて鑑賞教材を制作する他、教員への利用促進案内等を制作する。
自己評価・課題・改善案	「なつやすみの美術館」展で鑑賞教材を 4 種類制作した。「和歌山美術館教育研究会ニュースレター」を制作し配布した。

②講演会・解説会等

A. 講演会等の回数

平成 27 年度目標	29 回を目標とする。
自己評価・課題・改善案	33 回実施した。

B. 講演会等の参加者数

平成 27 年度目標	642 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	878 人参加した。

③ワークショップ・バックヤードツアー等の体験的プログラムやコンサート

A. ワークショップ等の回数

平成 27 年度目標	6 回を目標とする。
自己評価・課題・改善案	10 回実施した。(バックヤードツアー 2 回、ワークショップ 1 回、コンサート 1 回)

B. ワークショップ等の参加者数

平成 27 年度目標	80 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	250 人が参加した。

④県民や地域との連携

A. ボランティア活動の受け入れ

平成 27 年度目標	図書ボランティアの活動を受け入れる
自己評価・課題・改善案	延べ 296 人の活動を受け入れた。

B. 友の会等の支援組織の活動への協力

平成 27 年度目標	友の会、NPO 等の支援組織の活動に協力する。
自己評価・課題・改善案	和歌山県立近代美術館友の会によるバックヤードツアーや、和歌山芸術文化支援協会によるワークショップなどに協力した。

C. 学校・教員等と連携した事業

平成 27 年度目標	地域の教員等と連携して和歌山美術館教育研究会を組織し、中学校での宿題としての展覧会利用やワークシート制作など多様な取り組みを行う。和歌山大学教育学部と県教育委員会の連携事業の一環として、和歌山大学教育学部、同附属小学校・中学校と連携して展覧会を課題とした鑑賞、制作、指導法の策定に取り組む。和歌山市美育協会に協力し、鑑賞に関する研修会を開催する。学校教員との協力体制の強化を目的とした研修会を継続して開催する。
自己評価・課題・改善案	和歌山美術館教育研究会を 5 回開催するなど、学校や教員と連携した事業を実施することができた。

D. 地域と連携した事業

平成 27 年度目標	地域と連携した事業を行う。第 69 回 和歌山県美術展覧会(県展)を文化国際課との連携のもとに実施する。県警音楽隊たそがれコンサートへの事業協力を行う。マジカルミュージックツアー等イベントへの事業協力を行う。
自己評価・課題・改善案	第 69 回和歌山県美術展覧会、第 1 回ジュニア県展を実施した他、県警音楽隊たそがれコンサートやマジカルミュージックツアー、婚活イベント、保田龍門没後 50 年記念事業などへの協力を行った。

E. 県内博物館・図書館施設等と連携した事業

平成 27 年度目標	県立 4 館が連携して風土記祭り及びスタンプラリーを実施する。「和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議」の活動について事務局として活動する。
自己評価・課題・改善案	県立 4 館が連携して風土記祭りを実施した。また図書館を含む県立 5 館でスタンプラリーを実施した。「和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議」の活動に参加した。和歌山県文化振興財団の主催事業に協力した。

F. 観光資源として活用できる方策

平成 27 年度目標	案内表示等の多言語化を行い、利用についてアピールする。Wi-Fi 環境を整備する。
自己評価・課題・改善案	案内表示等の多言語化を行い、利用についてアピールした。Wi-Fi 環境を整備した。国民体育大会開催にあわせて施設のアピールを行い、国体プログラムの一つとして施設を紹介された。また観光ガイドなどへの広報を行い、展覧会のみならず訪問先として施設全体を紹介してもらうよう取り組んだ。

⑤人材育成

A. 博物館実習生・インターンシップ・教員研修などの受け入れ

平成 27 年度目標	博物館実習生・職場体験学習・インターンシップ・教員研修などを受け入れる。
自己評価・課題・改善案	3 大学 3 名の博物館実習生、延べ 81 名の職場体験学習およびインターンシップ、2 名の教員研修等を受け入れた。

⑥機関誌「NEWS」の刊行

平成 27 年度目標	機関誌を年 4 回定期的に刊行する。
自己評価・課題・改善案	No.83～86 を各 2500 部ずつ刊行した。

⑦県民への直接的情報提供

A. 問い合わせ・質問(電話・来館等)への対応

平成 27 年度目標	専門的内容に関する問い合わせ・質問(電話・来館等)に対応する。
自己評価・課題・改善案	12 件に対応した。

⑧メディア等への情報発信

A. 掲載件数、メディアへの広報・情報提供活動、番組制作等への協力

平成 27 年度目標	掲載 150 件を目標とする。メディアへの広報・情報提供活動を行う。番組制作等に協力する。
自己評価・課題・改善案	140 件掲載された。

⑨WEB による広報

A. ホームページアクセス件数・更新回数・工夫

平成 27 年度目標	ホームページ月間ページビュー数 15,000 件、更新回数は 24 回を目標とする。ホームページに工夫する。
自己評価・課題・改善案	ホームページ月間ビュー数は 25,631 件、更新回数は 36 回であった。

B. メールマガジン等の発行回数・工夫

平成 27 年度目標	12 回を目標とする。メールマガジンに画像を加える等の工夫をする。
自己評価・課題・改善案	12 回発行した。メールマガジンに画像を加えたほか、フェイスブック、ツイッターを通じて情報提供した。

⑩広報印刷物の制作

A. ポスター・チラシ・案内はがき・年間の展覧会カレンダー等の情報提供・広報活動

平成 27 年度目標	ポスター・チラシ・案内はがき・年間の展覧会カレンダー等の情報提供・広報活動を行う。
自己評価・課題・改善案	広報印刷物を制作し、情報提供・広報活動に努めた。

6 国内外との連携

美術館長による所見	資料貸し出しなどによる国内他館との連携のほか、関連組織との連携による事業展開など、持続的な活動を行っていることは評価される。
評価部会による所見	展覧会を通じて他館と協力していくことは、作品の貸出では行われているが、特に大規模展のような展覧会があればより内容の濃い協力関係を構築できるものと思われる。今後もこのような展覧会が続けられれば国内外との交流が深まり、活動が一層充実していくものと期待される。

①他機関への作品・資料の貸出し

平成 27 年度目標	他機関へ作品・資料を貸出す。
自己評価・課題・改善案	12 件の展覧会に作品の貸付を行った。

②国内外の美術館や関連組織等と連携した事業展開

平成 27 年度目標	国内外の美術館や関連組織等と連携した事業展開を行う。
自己評価・課題・改善案	2 件の事業を実施した。

7 安全と快適性

美術館長による所見	日常的な施設・設備の保守点検、修繕などにより、来館者ならびに収蔵作品資料の安全確保が担保され、またユニバーサルデザインやバイリンガル表示などにも、一定の前進が図られたことは評価できる。今後大規模修繕の具体的な工程表を策定し、緒に就けることが課題となる。
評価部会による所見	施設は高い水準で維持管理されていると思われるが、空調機器や照明、消火設備など大規模な改修が必要な時期が来ている。収蔵庫の拡張も必要である。単なる機器の修理や更新にとどまらず、施設の印象をがらっと変えてしまうような間取りなどの大きな変更も含めて考えるべきである。

①施設・設備の維持管理

A. 施設・設備の定期的な保守管理、日常的なメンテナンス、修繕、関係職員への教育等による安全確保

平成 27 年度目標	施設・設備の定期的な保守管理、日常的なメンテナンス、修繕、関係職員への教育等によって安全確保を行う。
自己評価・課題・改善案	施設・設備の定期的な保守管理、日常的なメンテナンスを行い、経年劣化等による必要な修繕についても順次修繕を行うことにより、安全確保を行った。

B. 施設・設備の改修や新たな整備

平成 27 年度目標	開館後 20 年の経過による各設備老朽化に対し、修繕を行う。
自己評価・課題・改善案	経年劣化等による必要な修繕を行うとともに、破損箇所が多くあった点字ブロックの取替修繕を行い、障害者の安全確保のための整備を行った。

C. 日常的なメンテナンス等による施設的美観の保持・衛生管理

平成 27 年度目標	日常的なメンテナンス等により施設的美観の保持・衛生管理を行う。
自己評価・課題・改善案	日常的なメンテナンスを行い、設備の保持を行った。また、正面玄関壁面や入口付近の清掃を実施し、施設的美観等衛生管理を行った。

D. 長期修繕計画

平成 27 年度目標	長期修繕計画を整備する。
自己評価・課題・改善案	自動ドア、空調設備等の修繕を予算範囲内で実施した。また、今後必要な大規模な修繕として、展示室照明器具更新、空調設備更新、収蔵庫増設工事の修繕計画を作成するとともに、実施に向け働きかけることが必要である。

②快適性の向上

A. バリアフリー対策・ユニバーサルデザイン等の対応

平成 27 年度目標	バリアフリー対策・ユニバーサルデザイン等の対応を取る。サインの外国語表記を充実する
自己評価・課題・改善案	施設各所の案内板に英語表記やピクトグラムを加え、外国人利用者に対する対応を図った。

B. 利用者に対する接遇

平成 27 年度目標	利用者に対し適切な接遇を行う。接遇の向上を図る。
自己評価・課題・改善案	利用者に対する接遇を適切に行うよう職員に指導した。

C. 快適性向上のための上記以外の取り組み

平成 27 年度目標	三年坂正面入口付近に駐車場サインを整備する。二輪駐輪場サインも整備する。
自己評価・課題・改善案	駐車場位置がすぐわかるよう、正面入口付近へ駐車場案内板を設置した。

③危機管理

A. 危機管理・防災体制

平成 27 年度目標	危機管理・防災体制についてマニュアルを作成、実地訓練等を行う。同体制について日常的な取り組みを行う。
自己評価・課題・改善案	地震防災訓練及び火災避難訓練を実施した。

B. 個人情報の保護・データ管理

平成 27 年度目標	個人情報の保護・データ管理を適切に行う。
自己評価・課題・改善案	展覧会等関連イベント参加者及び学芸員育成にかかる実習生の情報管理を適切に行った。

④職員研修

A. 館内外の研修参加実績

平成 27 年度目標	館内外の研修に対して、職員が参加できる体制をとる。研修参加は各職員あたり 2 回以上の参加を目指す。
自己評価・課題・改善案	機会がある毎にできるかぎり研修会に参加した。

⑤情報公開・利用者のニーズなどの把握

A. 使命、目標、計画などの方針の公開

平成 27 年度目標	使命、目標、計画などの方針をホームページ等で公開する。
自己評価・課題・改善案	和歌山県立近代美術館の使命を平成 28 年 3 月 4 日にホームページで公開した。

B. 実績や評価結果の公開

平成 27 年度目標	実績の検討や評価を行い、その結果をホームページ等で公開する。
自己評価・課題・改善案	平成 26 年度 和歌山県立近代美術館の運営状況に対する評価書を平成 28 年 3 月 4 日にホームページで公開した。

C. 入館者情報（年齢層・地域・情報入手手段等）の把握

平成 27 年度目標	入館者情報の把握を行う。
自己評価・課題・改善案	アンケートにより入館者情報の把握を行った。

D. 利用者の満足度・ニーズなどの把握

平成 27 年度目標	利用者の満足度・ニーズなどの調査を行う。
自己評価・課題・改善案	アンケートにより利用者の満足度・ニーズなどの調査を行った。また当館職員にアンケートを行い施設の不具合に関する調査を行った。

E. 調査結果等を反映した運営

平成 27 年度目標	満足度・ニーズなどの調査結果を反映した運営を行う。
自己評価・課題・改善案	外国人向けに案内表示に英語表記をした。また階段や床等で指摘のあった箇所の汚れを清掃した。

8 入場者数と財源の確保

美術館長による所見	入場者数、収入の両面で目標達成に今一步到達できなかった。広報活動の活性化や事業手法の見直しなどで達成できるよう、一層の工夫と努力が望まれる。
評価部会による所見	入館者数の目標を達成するよう努力が望まれるが、目標の設定の仕方自体も検討する必要があるかもしれない。

①入場者数

A. 入場者数

平成 27 年度目標	入場者数は 50,000 人を目標とする。
自己評価・課題・改善案	平成 27 年度の入館者数は 46991 人で目標の5万人を達成できなかった。広報活動の強化を図り、集客力アップを目指す。

②予算の確保

A. 入館料収入 達成率

平成 27 年度目標	当初予算 4,468 千円に対する達成率を 100 パーセントとする。
自己評価・課題・改善案	入館料収入は 3,613 千円、達成率 81 パーセントで目標を達成できなかった。広報活動の充実を図り、有料入館者数の増加を目指す。

B. その他の収入確保

平成 27 年度目標	駐車場収入 7,305 千円、行政財産使用料 1,604 千円、その他 873 千円を目標とする。
自己評価・課題・改善案	駐車場収入 5,970 千円、行政財産使用料 963 千円、その他 321 千円で目標を達成できなかった。美術館・博物館の利用促進を図るため、広報活動の強化を図る。

C. 外部助成金等の獲得

平成 27 年度目標	助成金 1,000 千円を目標とする。
自己評価・課題・改善案	外部助成金については、今年度は獲得できなかった。今後は獲得に向け、さらなる努力を行っていく。